

第四一回 光華講座

浄土の意義

東京大学教授

下田正弘

1 「場を問うこと」と「私を問うこと」

みなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました下田正弘です。どうぞよろしくお願いたします。本日はこの公開講座で、「浄土の意義」という、分不相応に大きなタイトルを掲げて、お話しをさせていただきます。

いま、一郷先生からお話しがありましたように、「浄土」ということばが、わたしたちに分かりにくくなっている。およそ身近なことばではなくなっている。日常生活では言うにおよばず、「浄土」を標榜するご宗旨においてさえも、「浄土」を説きにくくなっているといえます。しかし

このことばは、とてもたいせつな世界をあらわしたものです。

浄土をめぐる理解の困難さの背後には、慎重に考察すべきいくつかの問題があると思います。ここでその全体に触れることはできませんので、そのなかから一つ、中心になると思われるものを取り上げ、これまで私が研究を進めてきましたインド仏教の理解に立って、できるだけ分かりやすくお話し申し上げたいと思っております。

まず一つお考えいただきたいことがあります。それは浄土ということばが、土、国土、場所ですね、それをテーマとしていることです。これは注目すべきことがらです。というのも、私たちがふつうにたいせつだと思うテーマは「私」ですね。「私とはだれなのか」「私はいったい何者なのか」「私はどうなっていくのか」「私」というテーマこそがつねに課題になっています。ところが、今日のテーマは「土」です。「場」です。「私のだれ」を問うているのではなく、「どこにいるのか」を問うているのです。まずこのことの意味を念頭に置いていただきたいと思えます。今日の話はこの視点で一貫しています。「だれ」ということを問わずに、というよりも、じつはそれを問う時に、「どこ」こそが重要であることを、仏教はよく知っています。そして「どこ」ということを示すことばとして「浄土」が存在しているのです。

この「浄土」ということばは、中国で翻訳語として成立したものです。けれども、その基本となる理念といえますか、ことばの核はインドでできています。それが『無量寿経』のような經典にあらわれています。その理念を支える根拠を問うてみるなら、それは「どこ」という問いのたいせつさに至りつきます。

たしかに私たちは自分がある「ここはどこか」という問いを抱えています。さらに「私はどこからやって来て、どこに行こうとするのか」という問いを持ちます。自分の死を問題とするなら、それは避けがたい問いとなるでしょう。

そして「どこからどこへ」という問いは、「私はいったい何者なのか」という問いと、じつは密接に結びついている。この二つは不可分の関係にあります。自分の立つ場が分からずして、自分分らない。「どこ」の問いが明らかになることは、地図のうえに現在地とともに自分を発見するような事態です。どこに立っているかが不明なままでは、じつは「私」の問いも解けることはない。

ところが私たちは、「いま、どこにいるのか」を問わずに、「私」ばかりを問おうとしているのですね。所在、根拠から切り離された「私」をめぐることはばかりがあふれている。「どこ」からすっかり切り離された「私」は、浮遊する断片でしかありません。どれほど「私」を説明していても、最後にはばらばらになってしまう。全体から切り離された、いかに立派な「私」が出てきても、「どこ」が分からないなら、それは足場のない砂上の楼閣のように、やがては崩壊し消えていってしまう、そういう自己イメージにつながってゆく。

どんなことばに取り囲まれているか。それはとてもたいせつな課題です。どんなことばを遣うかによって、私たちの心のかたがが決まってきます。そしてその心のかたがにに応じて、外の世界ができあがってゆく。さらにその外の世界をことばに託し、心のなかに反映させてゆく。外ものごとと内の心は、ことばを介してお互いを照らしあう関係に立ちます。「心」と「もの・こ

と、「そのあいだに立つ」「ことば」。この「ことば」を見直していく時に、じつは「私」のまえに「どこ」が問われていることのたいせつさが見えてきます。この点にまず意識を、注意を向けておきたいと思います。

古代インドの宗教思想を四千年前まで辿ってみますと、そこで問われている問いは、まさにいま申し上げたかたちで出てきています。「私はだれか」のまえに「ここはどこか」という問いがあるのです。「ここはどこか」との問いが現れ、しばらく時が経ってようやく「私はだれか」の問いが出てきます。これは紀元前千五百年から紀元前八百年くらいの間の歴史なのですけれども、人びとが気づいてきたできごとを、ことばの足跡を辿りながら追いかけてみると、このことが分かってきます。

2 「ここはどこか」という問い

では、しばらく「ここはどこか」という問いを考えてみましょう。私たちは、この世界、「ここ」に生まれてきました。気がついてみたら、この世界の中にいました。この世界がいつたйдこなのかということを、私たちはまるで分からないまま、気がつくところの中に放り出されてしまっていたわけです。

ここに生まれてきて以来、私たちは手探りで「ここがどこか」ということを確かめようとしている。なぜ「ここ」に生まれてきたかが分からない。だから「ここ」を確かめたいという問いが

出てきます。「私」を問う以前に、その「私」を支えている「ここ」をはっきりとさせたい。成長し、生きていく過程、それはまさに「ここ」を突き止めようとする歴史だといってよいでしょう。

私たちには自分の根拠が分からないのです。根拠が分からないまま、なぜかここに何か誕生してしまったという事実から始まるわけです。しかも、ここ、この世界は、私が作ったものではない。すでに与えられていたもの、すでにあつたものです。そこに自分が生まれてきた。

そして生まれて以降、私たちは「ここ」にすでに存在した世界のかたちに、自分自身を沿わせてゆく。これが一つ一つを学んでゆく過程ですね。親から、あるいは先人たちから、前を歩いていく人たちから、ここはどういうところなのかを、教えられてゆくわけです。「ここはこんなところだ。だからこんなふうにして生きていきなさい。こうすれば身を守ることができる。こうすれば危ない。だからこうしていきなさい」と教えられてゆくわけです。そして少しずつ少しずつ、ああ、ここはこんなところなのか、ということを理解し、身につけてゆくわけです。

しかし、本当に「ここ」がどんなところか、すべてを分かりきつた人があるのか、というと、それはほとんどありえないでしょう。「ここはどこか」と問われたら、じつは私も分からないんだ、でも、いま事実としてここにいるんだ、そして、いま生きているんだ、という答えがほとんどの場合、正直なものになるだろうと思います。もし、ここはどこであるか、全て分ってしまった、見とおしてしまったとすると、どんな問題がおきても対処することができるでしょう。しかし私たちの事実はそうではない。ここを自覚していることが重要です。まさに、いまの現実が示

しているように、「想定外」ということばでしか表せないことが起きるのが、偽らざる事実です。あたかも、すべてを知りつくし、すべてを制御できるかのように話をするのは、たとえ科学者といっても、誠実さを欠いていると思います。

私たちは、しかし、分かる、分からないにかかわらず、ここに生まれてきた事実を拒否することはできない。事実としてすでに生まれてきてしまっているからです。そしてこの世界を生きてゆくためには、一つ一つこの世界に準備されていたものを、学び、身につけてゆくしかない。すでに準備されていたものを用い、そしてさらに何か作り出し、そこに付け足して、次の世代に引き渡さなければならない。私たちの一生は、「ここがどこか」ということが分からないままに生まれてきて、しかし、分からないその世界に「なっていく」ことしかできない。それが事実です。それが、「この世界、この土に生まれ、この世界、この土の者になる身」ということです。

私たちは日本のある時代に生まれてきた。そこに与えられている固有の環境があります。五十年、百年という、限られた、特定の時間に、この与えられた環境を自分自身で用いることができる身になってゆく。そのためには、ことを身につけ、知識を身につけ、そして技能を身につけ、そうやって、この世界を生きる者になっていくとするわけです。

インドの宗教の歴史のなかから仏教が出てくる以前の歴史を、ヴェエダをはじめとする聖典によって振り返ってみると、先に述べましたように、「ここがどこか」ということがはっきりした後、「ここ」に即したかたちでの「私」のすがたが出てくるのが分かります。ヴェエダの時代に「自己」は問われていません。ブラーフマナとよばれる、その注釈書の時代になって、自己

があらわれてきます。これをたとえて考えてみましょう。

自分の一生を一つの演劇、役割を演じていく舞台だとしましょう。すると、舞台が何であるかということがはっきりして、その上にいる自分が分かってくる。登場するあらゆる人びと、その舞台装置、それらはすべて上演の筋があつてこそ意味をもつ。私とはなにかという問いは、この役割を受けていくところに明らかになってくる。問わなければならないのは、この舞台のほうなのです。[「ここはどこか」のほうなのです。そうしますと、最初に「私とはだれか」という問いを立てるというのは、問いの順序が違うことが分かります。「ここ」という「場」が明らかにあって、そこに応じた「私」が出てくる。

けれども現在私たちは、思想においてであれ、宗教においてであれ、倫理においてであれ、問いを「私とは何か」ということから始めてしまっています。このために解けない問題がたくさん出てきてしまう。あるいは、解けたようにみえて、かえって分からなくなることが続出する。これで解決できたと思っても、いつもなんだかスルリと消えてしまう。

もう一度、私たちの生まれてきた事実に戻って、そのありさまを丹念に見直してみるところから始める必要があります。「ここはどこか」分らないままに、この私は誕生した。親から生まれたわけですから、いのちの根源が自分にはない。自分の命さえもどこから来ているか分からない。

おぎゃあ、と言って生まれて出てきた後に、母親に抱きかかえられる。そして私たちは親から自分の名前を語りかけられる。呼びかけられるわけです。この名前も自分でつけたものではな

い。けれども、外から呼びかけられつづけ、私たちはその呼びかけに対して応えていくことが少
しずつできるようになってゆく。親が私たちを抱きとり、呼びかけ続けてくれるということがな
ければ、私たちは応えようがない。

ということは、私自身の誕生の前提には、私が私になるまえに「私を受け取っている人があ
る」わけです。私になりゆく過程には、つねに私を受け取り、私に語りかけ続ける存在があるわ
けです。言い換えるなら、自分の誕生の前提には、「出会い」があるわけです。親との出会いが
あるわけです。その出会いを通してはじめて私が私になってゆく。

その親との出会いこそは、私自身にとっては、「ここ」との出会いです。そして、いま、私た
ちが切実な問いとして「私はどうやってゆくのか」、「私はこれでよかったのか」と問うときに
は、つねにこのとおりのことばで問いかけています。その「ことば」を通して、私自身のうちに
何かを喚起し、模索をしつづけています。この模索、葛藤を引き起こす「ことば」自身が、これ
また私が作ったものではありません。すでに与えられていたものです。つまり、与えられている
ものによってこの「私」を問うている、ということの次第があるのです。そうしますと、そもそ
も「私」は「出会い」がなければ生まれようもなかった。この事実^がに立ち戻ってゆく必要があり
ます。

3 菩薩という存在

こう考えますと、私ではなく、なぜ「場」が、「土」がことばとして浮かび上がってきたか、「浄土」ということがなぜ仏教の中で生まれてきたか、そのことが少し理解できるようになると思います。

仏教の歴史を見てゆきますと、「ここはどこであるか」がつねに問われており、与えられた出会いを通して、はじめて存在が存在となる事態が示されています。この課題を、とても分かりやすいことばにしたもの、それが「菩薩」という存在です。仏というよりも、仏に「なりゆくもの」としての「菩薩」。それを問うわけです。

仏がいった何者なのか、私たちはそればかりを問いたくなる。それが分かれば、仏教の極意が手に入ったような気持ちになる。けれどもそれは、私が立っている場を問うことなしに、自分を知らうとする誤りに通じています。私探しを繰り返してしまうこと、それは堂々めぐりの、まさに輪廻とよばれる事態に陥ってしまいます。私が何者であるかということ明らかにするためには、私が私になってゆくまでにどんな前提があったのか、どんな過程があったのか、それを知る必要がある。ちょうどそのように、仏が何者であるかを知るためには、仏が仏になる道、仏になりゆく存在、つまり「菩薩」を問う必要があるのです。

釈尊は、この世界で悟りを開いて仏になられたわけですからけれども、その釈迦がどんな人であつ

たのかを、仏教徒たちは探し求めました。もちろん、釈尊に出会った人たちもいますが、それはわずかな数です。千二百五十人くらいだったかもしれない。後の無数と比べていい仏教徒たちは釈迦という仏には、まったく出会ったことがない。しかし、物理的に出会わずとも、仏の存在が一体何であるかということ、かれらはどこかに確信してきた。だからこそ、その教えを身に受けて継承しつづけた。ここに仏教の歴史があるわけです。

その仏教徒たちが、ブッダが一体何であるかということ、を明らかにしたいと探求する中で出てきたもの、それが「菩薩」です。かれらはこう理解します。釈尊はなにゆえに仏になりえたのか、悟りを開くことができたのか。それははるか、はるか、はるかなる過去において、釈尊は仏と「出会っている」。仏との出会いを経験している。その出会いによって、仏という存在になる道が開かれたからだ。これは、東南アジアの仏教——上座部仏教であるとか、テラワダ仏教であるとかと言われますが——であつても、チベットの仏教であつても、中国、朝鮮半島、日本に入ってきた東アジアの仏教であつても、共通している理解であります。

どうして仏になれたのか。仏と出会ったからだ。出会いによって、その出会ったものになつてゆく、出会った存在になつてゆく道が開かれる。これはきわめてシンプルな、しかし重要な押さえです。

釈尊が出会った、そのはるか、はるか過去の仏の名は、燃灯仏と呼ばれます。明かりを灯す、火を灯す、という名前の仏です。仏になりゆく火を灯してくれた、そういう名前を持っている仏と、釈尊は、はるか、はるか過去において出会われた。

そしてその出会いの時に、願いが灯った。私も、この仏と同じ存在になっていくという願いが灯された。燃灯仏という仏によって、釈尊の心に仏の火種が灯された。その灯火を釈尊はずっとずっと抱えつづけてきた。幾たびも生まれ変わりを繰り返しながら、その灯火を失わずに消すことなく保ちつづけてきた。その灯火がついに釈迦をして仏にならしめた、こう理解しているのであります。

「菩薩」という存在、つまり、なにゆえに仏になったのかという根源に、意識の光を当てていこうとする仏教。これは「存在」をとても深い所から照らし出そうとする試みです。いま、結果として見えているものだけを扱っていかうとするのではないんですね。いま見えている世界が、どんな見えない世界から生まれ出てきたか。見える世界の背後に、どういう見えない世界が存在しているか。その見えない世界との関係において、いま見えている世界を捉えようとする、非常に深い存在の理解があるのです。

では、燃灯仏から仏になる願いの灯火を灯された後、釈尊はどんな人生を歩んでこられたのでしょうか。それは一言にいきますと、さまざまな自己犠牲の歴史でした。例えばウサギに生まれた時に、その身を飢えた虎に布施をする物語。王子として生まれてきた時に、自分の財産と国と妻子、全てを求める一人のものに布施をしていく物語。じつにさまざまな物語が残されていますが、それらは、自分という存在を何かに向けて犠牲にしていく道なのです。

慈悲を説き、平和を説き、涅槃という寂靜な世界を説く仏教の教えに比しますと、こうした犠牲物語は、ちよつと異質なトーンに感じられるかもしれません。じつさいに、これは本来の仏教

的なものではなく、なにか民衆的なものが入ってきた結果だという理解をなす研究者もありません。しかしこれはきわめて重要な仏教の要素です。

耐え難い犠牲を払っていく中、灯火がずっと保たれ続けてきている。仏になってゆくという願いの灯火は、いかなる風雨によっても消されることなく、保ちつづけられてきている。そして幾たびもの人生を重ねながら、釈尊は、ついにこの娑婆世界に誕生し、そこで仏になる最後の道を歩かれた。それがこの八十年、釈迦の生涯だ、そう考えられている。

八十年の生涯というのは、仏への道の、大きな氷山の一角にすぎません。わずか八十年だけを照らしてみても、釈尊が仏となったことの意味は明らかにならない。その背後に、足下に、はるかに深く広い世界が隠されている。その全体とともに、この八十年という生涯の意味を見通さねばならない。それが仏教徒が理解する、歴史の中の仏教であります。

4 深遠なブツダの生涯理解

ところが現在は、八十年の釈迦の生涯、ゴータマ・ブツダの生涯を一人の人生伝記として描けば、それで仏教の意味がつきてしまうかのように理解してしまっています。図書館に行っても、書店に行っても、仏とは何かというと、ルンビニーで生まれ、クシナガラで滅していく、どういう親の元に生まれて、どんな人生経験をしてきた人で……という、私たちの、ちょうど誕生して最期のお葬式を迎えるまでの、その間の時間で閉じてまった仏の説明しか目にする事ができません。

ん。これは近代になって、仏教研究者たちが仏の存在をめぐる視野をきわめて狭いものにしてしまった結果でして、大きな問題点です。

ここで専門的な詳細をお話しする時間はありませんが、史料の事実はどうなっているのか、かたんに申し上げておきます。ブツダの生涯を、誕生して亡くなるまでの一つの歴史記録のように記しているものは、じつは、チャリタ文学といわれるものをのぞけば、ありません。(ロミラ・ターパルが指摘しているこの文学の特殊性については、ここでは触れません。)ブツダの誕生を記す記録、史料は、必ず「誕生以前」から始まります。そしてどこで終わるかという点、ブツダの悟り、あるいは、初めて教えを説く、初転法輪と言われますけれども、そこで終わっている。これがまず大多数の文献であります。

もう一つは、珍しい部類なのですけれども、亡くなる時点をテーマにした記事があります。これは『涅槃経』という經典になっています。そしてここでは、亡くなることをテーマにしたように、必ず亡くなった後に話が繋がっています。一つには、どうやって亡くなった後に、この教えが編纂されたかというテーマに繋がりが、もう一つは、ブツダの遺骨が分配されて仏塔ができてきたかという話に繋がっています。このように、入滅された後の記事につながるところに『涅槃経』編纂の本来の狙いがあります。

現在、私たちが手にするブツダの一生、生まれて亡くなるまでの物語は、じつは研究者たちが、これらの二つの資料を集めて、パッチワークとして作り上げた、人工的な産物です。生まれて死ぬまでの仏という理解が出てきたのは、ほとんど明治以降になってからなんです。ここに

は仏教理解の近代化の罫が潜んでいます。

じつさいの歴史で仏教徒たちがブツダをどう見てきたかと言いますと、どうやってこの娑婆世界に辿り着いたかというのを、誕生以前に遡って描きつけてきています。そしていよいよ、ここでシュットーダナと、マヤーという、二人の国王と王妃の間に誕生し、二十九で出家して…という物語につながってゆくのですが、ここできわめて重要な場面が二つあります。

一つは出家をする時の決意。もう一つは悟りに至る瞬間です。まず、出家をする時に、シッター王子に迷いが起こります。いま国を捨て、家族を捨て修行に入っても、この道は本当に達成されるのか、挫折するのではないか、という、強い疑念が生じます。その時に、何がこのブツダを出家の決意に邁進させたかと言いますと、「過去を想起すること」だったのです。

燃灯仏に出会って、仏になる灯火をもらい、そしてそこで願いを立てて、幾たびも苦難の生を巡りながら、一度も消すことのなかったその灯火。それとともに過ぎ去った人生一つ一つを、たしかに思い出すことだったのです。この想起によって、出家を決意するのです。「願いの想起」が「出家の決意」なのであります。

同様のことが悟りの場面で出てきます。出家の後、六年の困難な修行を経て、菩提樹のもとに座って最後の瞑想に入ります。その最後の最後の瞬間に、迷い、誘惑が出てきます。その誘惑は、私たちが抱えている人間存在そのものに宿りつづけている、暗がりの中の盲目的な力、無明の力です。方向の取れない暴力的な力が押し寄せてくるわけです。それを退けて釈尊は悟りに至るのですけれども、悟りに至った証明を、いったいどうやって出したかという点、これは、仏像を思い

出していただければいいのですが、大地に証明を乞うのです。悟りの場面の仏像は、釈尊が大地に指をつける「触地印」という印を結んでいます。大地に証明を委ねているのですね。大地の女神に。大地の女神というのは何を意味しているのかというと、過去からの歴史の全体です。

5 仏の根拠としての菩薩——浄土と歴史

日本の大地は、いま、大地震、震災で砕け散り、そして放射性物質が覆いかぶさっている。どんなに土壌を入れ替えても、土を積み上げても、本当に消えさせることはない。

記録を辿ってみると、九世紀には貞観の大地震が起こっていたというのですね。

大地は、これらの歴史を全てを知っています。私たちが知らない過去、生まれ、そして亡くなつていった人たちの、歴史全てを担っています。受け取っています。その大地に証明をさせるということを、釈尊は仏になる時にするわけです。出家のさいの「過去の記憶の想起」と、悟りに至る時の「大地の証明」は、極めて重要な、ただ一つのテーマであります。

菩薩における過去の想起、永劫の過去からの生まれ変わりの人生と誓いの想起、これを現代のことば言い換えますと、歴史そのものの想起といつてよいでしょう。歴史全体を受けていく。そこでは、善悪を論じていることなどはるかに超えている。善もあり、悪もあり、その二つがいかに乗り越えられずとも、ただそれを身に受けつづけていくしかないのがこの世界です。「ここがどこか」分からない中を、分からないままに生きていかなければならないのです。善、悪、すべ

てを受けつづけている歴史そのものの、それを想起し、受けとるところに、仏の誕生があるわけです。

一人の仏は一つの世界に誕生する。これが仏教のおよそ共通する原則です。少しバリエーションがありますけれども、ここでは細かいことには入りません。私たちの生まれた、この娑婆世界の歴史がはつきりする、それを担って、その存在が釈迦牟尼仏という仏の誕生だったのです。仏教徒はこの事実を深く受け取り、仏の伝記、つまり仏伝を完成しているわけです。

私たちは「無常のただなか」にあります。どんなに先んじて想定しようと思っても、それがかなわない世界に生まれ、生きています。あらゆるものが壊れ、移り変わる、留められないただ中にあります。その中にありながら、しかし灯火は失われていないのです。それは、燃灯仏に出会った釈尊が仏になったという事態を受け取った、仏教徒の歴史が証明しています。無常であることと、仏に成ってゆくこと。これは、じつに一つの重なった事態として受け取ることが必要です。

ここまでくると、「浄土」ということが生まれ、「浄土」という世界が生まれてきたことが、ずいぶん近づいてきます。釈尊が仏になられた。それはこの世界の歴史全体を受け取ったことだった。それはまさに人々を支える「場」を明らかにしたことです。「ここはどこか」という問いを説明するのではなく、事実として受け取っていった。仏の誕生は「場の完成」と一つなので

す。

浄土は「清らかな土」と書き、清らかな場を意味しますが、これは原語を辿りますと、場を清

らかにしていく「行為」も意味します。浄化してゆく。私たちの生きざまのままに、さまざまに汚してしまった大地を、いかにすれば清らかにしてゆけるのか。ここを少しずつでも浄化してゆかなければ、いま生まれてきた子どもたち、これから生まれてくる子どもたちは、いかに大変なものを背負っていくことになるでしょうか。たとえわずかであっても、「土」を「浄」化しつづけなくてはならない。「浄土」の意味は切実です。

では、浄化行為はどこに成り立つのでしょうか。釈尊の一つ一つの過去世の生涯が示すところをみれば、それは自己を犠牲とする行為において成り立っていることが分かります。自己を布施してゆく。自分のたいせつなものを与えてゆく、この行為によって、穢土が浄土になってゆく。大地が少しずつ浄化されてゆく。

この非常にたいせつな行為の積み重ねが、厳然として存在し、その行為が仏を生み出してきた。釈尊は幾たびも生まれ変わらなければならなかった。それが「浄土」という理解の一つの重要な柱です。犠牲行為による大地の浄化。そして浄化されるということは、「ここ」が仏の国になっていくということです。仏国土になる。じつは「浄土」ということは、「仏国土」を意味するサンスクリットを、中国で意味を取って訳された意識です。けれども、「仏国土」の誕生は、菩薩としての儀性行為の結果として、すなわち浄化行為の結果として成り立ったことを知るなら、中国ではみごとにその意を取って訳していることが分かります。私たちが自らできることを一つずつ、たしかに積み重ねていく、漸次的な過程、それによって浄化はできてゆくのであります。ここには歴史的な存在としての人間がみごとに映し出されています。

6 浄土の含意

これとは一見して対照的な、ときにまるで矛盾をするかに思える「浄土」理解が、仏教にはあります。それは、自分自身の心が清らかになる瞬間、浄土はそこに本来的に実現しているのだ、という理解です。ここをはっきりと表明するのは大乘仏教になってからです。しかしその含意は、「仏とはいったいどういう存在なのか」という問いに胚胎されています。漸次的な浄化過程としての「浄土」という理解と矛盾するものではありません。

心が浄化されることよって浄土が「やがて」「必ず」実現される、ということは、すでに実現されているということと、「ニアリーイコール」なんです。まったく同じだという意味ではありません。ほとんど同じという意味で、「同じ」と言われています。必ず、いつか、同じになるのです。それは将来すでにこうであるということが「見とおせた」ということです。

「見とおしを」得たとき、「浄土」はそこで潜在的に一拳に達成されている。プロセス一つ一つを長いこと積み上げていく過程を表すことではなく、すでに将来を瞬間的に結果として与えられた、確信を表すことばです。こうしたことばづかいの相違は、私たちが何かを理解することと、一度理解したことを実現していくことという、この二つの行為のあいだにある相違と同じです。

何かをなし遂げようと決意をする、その決意によって道が開かれ、やがてプロセスを経て一つ

のことが実現するというのが、私たちの人生です。最後までを瞬間に見とおしたという確信、決意がなければ、立ち上がって道を開いてゆくことも起りえません。実現された結果は、すでに決意をした瞬間に宿っていたと、こういう言い方が成り立つことになります。ことばづかいとしてはいっそうに不自然ではないのです。

この二つを相互に矛盾するものと捉えてしまう人たちも多いです。この二つは違う仏教であると。一つ一つ達成してゆく道と、瞬間に達成される道。頓悟と漸悟。それはまったく別のものがあると。しかし仏教は、この両極をつねに抱えています。この二つがあって初めて一つの悟りに向かう、仏になりゆくという事態を表現しています。

一つの浄土が実現された、完成されたということは、そこで仏になったものがあるという意味です。仏になる道を歩き、無常のただ中、次々に願いを壊し灯火を消す嵐が吹き、大地が揺れるなかで、ついにその灯を守り通し、実現させ、仏になったものがあるという意味です。

言い換えれば、「ここはどこか」という問いを問いとして抱え、その問いを、分からぬ「ここ」を「歩きつづけるなかから明かにしていった人があるのです。私たちは最後まで「ここはどこか」ということが分からないまま、見えないままに、あちらこちらと浮遊するような存在ではない。はつきりと一つの歩むべき方向があることを、指し示してもらっているのです。それが「浄土の存在」です。「仏国土の存在」です。仏となつていったものが、たしかにあるということです。

7 浄土の諸相

このことをおさえておきますと、浄土理解にある、いろんな側面が矛盾なく理解できるようにあります。まずは分かりやすく、「浄土」と聞いた時に、死んだ後に生まれる世界だとする理解があります。死後に誕生するところ。これはなんだか迷信的に聞こえて、今おそらく、お坊さんたちでもあまり語りたくない世界なのかもしれません、しかしこれは、今までお話ししてきたことを前提としてお考えていただければ、理解できると思います。

逆に、死後の世界がないと断言することは、どういう意味を持っているか考えてみましょう。私の存在は、もう私の葬式で終わってしまう。この世界観はどこと呼応するかというと、私の存在は私の誕生日から始まる、そこと呼応しています。結局、生まれて死ぬまで、そこに自分を閉ざしてしまう世界観、自己観です。

ところが私は何によつてあるか。「出合い」によつてあるということ、詳しく申し上げました。この世界と出会った、親と出会った、親が受け取ってくれた、というところから始まって、すでに準備されていたこの世界は、親よりもさらにその先の親、さらにその親…というふうには、ずつと過去に繋がっています。「ここ」はそういう「場」であります。

誕生日が私の全てを規定するのかというと、そうではない。もつともつと広がりがある。とすれば、私は死ぬ時に終わってしまうのかというと、そうではない。もつと広がりがあるだろう。

その広がり、現代ではことばが貧困になっていますから、ほとんどイメージできないかもしれません。このイメージは、時代によって、それぞれの文化的な環境によって、背景の相違によって異なっています。けれども異なりながらも、それは存在していることが重要です。

釈尊の生涯、八十年の生涯が氷山の一角であって、その背後に菩薩としての、まさにこの世界そのものの広がりを抱えていたように、私たち自身の存在も、同様の広がりを抱えている、こう考えていいのです。

そうすると、死で終わってしまったものがある。たいせつな広がりがある。じつさいに、自分が死んでも歴史はつづきます。私たちがいま生みだしているもの、残しているものは、私たちが死んだ後も、しっかりとつづいているのです。自分が生み出したものは、それはある意味で、自分自身の存在の連続です。そこには責任があります。その責任を、どんな場でどうやって果たしていけばいいのか。

この問いに応えるためには、自分の死を経ても存続する世界を、なんらかのかたちでイメージできる必要があります。そうでなければ、未来にたいして無責任になってしまいます。ここに、死後の世界として「浄土」が与えられていることが、あらためて意味深く思われます。それは自己存在の、深い意味での連続を知らせ、存在したこの世界への責任、応答をなりたせる世界です。「臨終での浄土往生」という、現在はどこらかといえは習俗的な迷信として退けられがちな観念は、深い倫理的な意味をもっています。

つぎに「浄土」の多数性という問題があります。「浄土」は、「仏の国土」です。大乘仏教の理

解に従うと、たくさんの仏が存在することになります。そしてその仏、一仏、一仏が、一つの浄土を有しているのですから、無数の仏国土があることになります。

これは、私たち一人一人が個別に存在しているありさまと重ねると理解がしやすい。一人ひとり人は、一人ひとりに固有の歴史を抱えています。違った環境、時代に生まれ、違った育ち方をし、違った思いを抱き、違った最期を迎えます。この個別性は動かせない。どんなに理解をしようと思っても、私たちは個別性を越えられない。とても大事な点ですね、個別性を本当にたいせつにしなが、しかし、その一人ひとりが一人ひとり違った人生を歩み、違った世界を抱え、歴史を抱え、それを通して仏になっていく。そうすると浄土は、無数に存在していることになりました。

これは日本ではあまり出てきたことはないんですけども、中国やチベットの歴史において現れてくる浄土の理解として、「千年王国」ということばで表現される理解があります。これは何かといいますと、浄土がこの世界に実現されるまで一千年かかる、そしてついにその理想がいま実現されようとしている、その時がついにやってきたという、そういう理解の仕方であり、その理解にそった宗教運動です。

浄土が千年後のいま実現されようとする。これはメシア思想と重なる特徴を持っているものですね。ここには、浄土実現に長大な時間がかかること、そしてその長大さが一挙に飛び越えられる「いま」があることという、すでに述べました「頓悟と漸悟」という差異を反映した、その亜種と考えられる浄土理解です。

一つの事実が完成するためには、一つずつの積み重ねが必要なこと。しかし、それをただ待つわけにはいかないと思うこと。むしろこの世界をよきものに変えたいと思う欲求が動いてしまうこと。これらはいずれも自然な人間の心理です。それで時に早まってしまおうということがある。時が熟しているかどうか、私たちに分かる場合もあるでしょうけれども、多くの場合にそれは分からない。時が熟してくれて、事実として現れてくることを待つ必要があるにもかかわらず、それが待ちきれず、社会を改革してゆこうとする。いふなれば、浄土を力づくで実現してゆこうとする、現実改革運動、これに結びついてゆきます。ここは要注意です。

最後は、死後に生まれる世界と重なってまいりますが、「臨終」ということを、仏教ではやりたいたせつにしている。それはなぜかという点、とても分かりやすい。「ここはどこ」という、私たちがいなく根源的な問いに、その解決のかががあります。「ここ」になったのは、私たちが、身体を持って生まれてきたからです。というより、私たちが「ここ」に生まれてくることは、身体的存在になったことです。ところが、臨終というのは、その身体が消失するときです。そうすると「ここ」が、今までと同じでありえなくなってしまう。「ここ」が「ここ」でなくなるわけです。その時に、はじめて彼岸がおおきな意味を持つてくる。「浄土」が切実な意味をもつて迫ってきます。仏教において、「臨終」と「浄土」が結びついているのは、自然なことです。

以上、私なりにインドの仏教を辿りながら、浄土にどんな内容が込められているか、なぜ、こ



のことがたいせつにこれまで継承されてきているのか、駆け足でお伝えいたしました。拙い話をお聞きていただきまして、まことにありがとうございます。